主体と時間のレイヤーとしてのランドスケープデザイン ー石巻南浜津波復興祈念公園のコンセプトー

Landscape design as subject and time layers

ーDesign concept of Ishinomaki Minamihama Tsunami Memorial Parkー

佐々木 葉 Yoh SASAKI

早稲田大学創造理工学部社会環境工学科

1. コンセプトまでのみちのり

(1) 失われた風景の手がかり

ランドスケープデザインは、どんな場合もサイトにすでにある形と意味を読み取る場所から始まる。石巻南浜津波復興祈念公園も同様である。しかし 500 名の方が亡くなった被災地に国営の追悼と鎮魂の場を作るというものものしい言葉の響きは、敷地との対話をこわばらせる。

復興祈念公園の理念が定まり、石巻での公園計画の議論が有識者会議によって進められ、基本方針とそれに対応する空間の骨格がダイアグラムとして敷地の上に落とされた。それに形を与えていくための有識者委員会、そして空間デザイン検討部会と植栽検討部会が平成 26 年 8 月に設けられた。この空間デザイン検討部会の一人として私はこのプロジェクトに関わることとなった。開始直後からほぼ毎月開催された部会において、一気にデザインコンセプトが練り上げられていった。その手がかりは、観察された大地の営みと、詳細なまちの模型にあった。

(2) まちの記憶

岩手、宮城、福島復興祈念公園のサイトは皆特徴が異なる。石巻市南浜は最も「まち」なサイトであるが、かつてのまちの面影は瓦礫の撤去とともにほぼ失われていた。そこに被災前の状態を詳細に再現したまちの模型が持ち込まれた。石巻専修大学「3D プリンタ活用による石巻沿岸部の復元立体模型製作」プロジェクトによるものだ。この模型を見て息を呑んだ。この広大な空間には、なんという密度で人の暮らしがあったのか。ほぼ更地となった敷地の眺めからは体感し得ない密度感である。

話は遡る。私が東北の被災地を初めて訪れたのは 2011 年の 6 月で、学生二人とレンタカーで回れるだけ回った。折れ曲がった電柱や崩壊した建物、ひしゃげた車が至るところにあり、これらの衝撃的な姿に目を奪われた。しかし所々に住宅の基礎だけが残り、それは玄関、居間、浴室と

間取りそのものを示していた。基礎から毎日の暮らしの場面が識別され、茫漠と広がる空間の中でそれはあまりに小さかった。これはすなわち、目の前の空間を埋めていた暮らしの数、失われたその数の果てしなさを直覚させた。

その時の感覚がこの精巧な模型から蘇った。40 ヘクタールの平面図の上に描かれた軸線やゾーンからは感じとれない失われたまちの密度。これを何らかの形で公園に引き継ぐことが必要だと感じた。

(3) 大地と生き物の営み

空間デザイン検討部会のメンバーで環境デザイナーの阿部聡史さんは地元石巻におられ、公園の敷地をつぶさに観察していた。過去の地形図、地質図による場所の履歴、そして津波後の環境の変化の観察記録を美しいレポートにまとめて、会議の場に提示された。そこには水と植物と動物が、千年に一度の攪乱をうけた環境に自ら新しい姿を描き出しはじめていた。その事実が語られていた。大地はなりたがっている形に戻りつつある。背後の丘から供給される地下水と雨水は、重力と土質のレイヤーに従って自ずと落ち着く場所を湿地にした。そこに植物、昆虫、魚、鳥が棲み家を見出した。この正直なメカニズム、たくましい力と姿もやはり公園に引き継がれねばならない。

(4) 3つのレイヤー

この2つ媒体を経て公園の敷地にすでにある、あるいはあった形と意味が炙り出された。この上に復興祈念公園として求められる祈りと願い、追悼と伝承を重ねていく。3つのレイヤーと後に呼ばれるデザインコンセプトは、こうして導き出された。もちろんこれは委員も事務局も入り混じっての対話から生み出されたものだ。ここまでの説明はその場に居合わせた私の感覚として綴ったものに過ぎない。

それぞれのレイヤーをどのように敷地の上に確定していくかには、まだ幾ばくかの道のりがあった。まちの記憶のレイヤーは、結局街路を残すことを基本とした。建物の密度をそのまま伝えるのはあまりに生々しい。かつてのまち

の姿を想い描く手がかりには、道と辻、地名がふさわしいのではないか。そしてその道は園路として機能する。

大地と生き物の営みは、土地の履歴として、浜、湿地、微高地といった昔の地形図と、ボーリング調査や出現した湿地の位置に基づいて定めた。排水路でありまちの記憶でもある聖人堀も活かすこととした。追悼と伝承のレイヤーは、最終形に落ち着くまで揺れた。伝え聞くご遺族の声から、祈りのかたちの難しさを知る。時刻や天体が導く軸線、日和山や門脇小学校への意識、セレモニーの舞台装置の必要性。すでに石巻を訪れる多くの人が手を合わせる「がんばろう石巻の看板」。これらを巡りながら、他のレイヤーとの調整のなかで徐々に場所を見出していった。

いずれにしてもこの3つのレイヤーというコンセプトにたどり着いてからは、その具体の形を彫刻し、数多の制約と機能を満たす答えを徐々に解像度をあげながら調整していくことで設計は進んだ。つまり一つ一つの場所や事情に向き合いながら毎回考える。悪く言えば行き当たりばったりなのだが、いま操作する対象を超えてぼんやりひろがる目に見えない頭のなかの風景を最大限思い浮かべながら、小さな決定を重ねる。それはもしかすると、長い時間をかけて多くの主体がそれぞれ下してきた決定や選択の集積としての、まちの記憶と大地と生き物の営みの生成プロセスに準じる思考なのではないか。祈りと追悼も個々の主体によってこれから長い時間をかけてこの場所に降り積もっていくものとしてあるだろう。これらが場所にまわり、留まることで、緩やかなコンテクストを生成していく。その初期値と補助線を描く仕事としてのデザインといえようか。

2. 主要なエレメント

以上、個人的な思いを長々と綴ってしまったが、以降で主要な対象についてごく簡単に述べていきたい。

「追悼の広場・祈りの場・中核的施設」：先に述べたデザインアプローチでは、全体がぐずぐずになって40ヘクタールの公園のイメージアビリティが高まらない。そのため核となる場所に統一的で洗練された造形を挿入することは必須であった。祈りの広場と中核施設を円を基本とした強くも優しい造形として、街路軸と水面に絡ませ配置した。祈りの場の献花台は原寸模型で検討し、格を保つ努力をした。

「築山」：もともとの土地に存在しない盛り土による築山については、かなりの議論があった。しかし当時は避難築山の機能を満たすことが復興交付金による事業の条件とされ、その機能から位置も定められた。結果的に公園全体を見渡す視点場を得たことは歓迎したい。

「善海田池と聖人堀」：この場所での大地の営みは水に最もよく現れる。おのずからなる位置に水面を配し、まちの記憶でもある聖人堀を開渠化した。旧北上川の堤防整備で

発生した稲内石を捨てずに公園内随所で使ってもらった。善海田池と名付けられた水面については、そのエッジの形や構造と水辺をとりまく柵、さらに水面を渡る街路をたとえ一部でも橋にできなかったことが悔やまれる。しかし人の手が入らず生まれた水際が部分的に取り込まれており、さらに時間の中で育っていくことを期待している。

「運動施設と市民活動拠点」：公園は国、宮城県、石巻市の3主体が分割して整備する。西側にポンポンと並ぶ広場群は市の運動施設として日常的な市民利用が意図されている。追悼と伝承を目的とする公園にスポーツの歓声が響くのはいかがなものかという声もあった。それは公園内の随所から隣接する工場が眺められることを疑問視する感覚に通じる。私としては、この公園は特別であるが、普通であってよいと考える。3つのレイヤーも公園を訪れた人がふと感じ取るものであってよい。日常生活の中に、祈りと伝承の瞬間が紛れ込む。市民活動拠点は伝承と同時に、緑化活動の拠点となっている。本稿ではデザインにおける市民との協働については言及していないが、それなしには公園は成立せず、拠点へのリスペクトは常に示された。

「道路と駐車場」：まちの記憶のレイヤーはかつての街路が担うのだが、新設される公園へのアクセス路と駐車場は、現代の交通安全基準が決める形を越えられず、レイヤーの街路と対立した。特に南から入って濡れ仏の前でふにやりと曲がる道路は、大切な通りであった南北の軸線を弱めてしまった。道路で境界を縁取られた公園全体も周辺街区から浮いている。復興事業の随所にみられる造形である。

「植栽」：風が強い。苗木が育つには過酷だ。制砂垣を巡らせて松原が育つのを待つ。門脇小学校への視線を導く風にゆれる千萱の抜け、人の近くの色気のある花と樹木、水際を曖昧にするヨシ、これらが風景となるのもうしばらく待たねばなるまい。植栽チームの技術と市民活動がゆっくり、確実に緑を育てくれるだろう。

その他にも辻の東屋、遺構の控えめな保存、石巻市による慰霊碑、寄贈される彫刻の収め方、案内サインなど、完璧とは言えないが、次々出現する事をその都度コンサルタントと事業主体と小野田泰明先生と一緒に収めていった。

3. 主体と時間のレイヤー・ランドスケープ

約6年間にわたり関わってきた公園が令和3年3月28日に開園する。もちろんそれが完成ではない。樹木が育ち、水辺が落ち着き、生き物が棲息し、人々が訪れ、眺め、触れ、感じ、想う。毎日、毎年繰り返されるそれらが、主体と時間のレイヤーとしてランドスケープを生成する。すでにあり、失われ、生まれ、見出され、整えられた数多のことの集合的な造形が、目に見えない風景に重なって、一人一人の何かを大事に思う気持ちに繋がればとても嬉しい。